



# 私から公へ

永田円了

## Into The World

現在日本中で、家族以外との交流を絶ち、引きこもる人が 100 万人いるといわれる。富山県内では 9,000 人、40 代、50 代、そして 60 代が全国平均を上回るという。家族という“私”の領域のみで生活し、言わば幼虫がサナギの中で大人になってもまだ外に出ない状態といってもいい。外とは“公”の世界である。1 人ひとりが責任をもち、自立して交わる公の領域を拒む人たちがこれほどまでにいるということに驚く。

100 万人もの引きこもりの人たちは、生まれも環境も異なり、それぞれに個別な問題を抱えている。ただこの引きこもり問題で共通することは、父親不在であるということである。誤解しないでほしい。これは何も母子家庭だから問題、ということではない。両親がそろっている家庭でも多くの父親不在の例はいくらでもある。仕事人間で子育てを母親のみに委ねている世の男たちはいくらでもいるのである。

いや、俺は子供と週末一緒にテレビゲームをしているよ、公園でキャッチボールをしているよ、というかもしれない。しかしこれは単に母親的子育ての延長を行っているだけで、本来の父親の役割を果たしているとは言えない。そこには**父性としての父親**が存在しないからである。一方母子家庭にあっても、一人で母性と父性をバランスよく使い分け、みごとに子育てを行っているお母さん方もいくらでもいるということの特筆したい(落合恵子氏と母親の事例)



## “私”の領域、“公”の領域

同じ霊長類であるサルの世界では、母親はいても父親は存在しない。それは繁殖期にメスは複数のオスと交尾するので誰がその子の父親か特定できないからである。よってサルたちは、母親中心の家族社会のなかで一生を過ごすことになる。言い換えれば、サル社会には、“私”の領域はあっても、他の世界と交わる“公”の領域は存在しないということである。

では何故人間は父親の役割を必要とするのか。その理由は、人間社会は二重構造をもっているからである。母親の無償の愛に包まれた“私”の領域と、一人ひとりの義務と責任が伴う“公”の領域、この二つの領域に人間は生きているからである。

“公”の領域とは、公共性を重んじる社会。公共性とは、社会的交換を成立させる条件。社会的交換とは、等価な交換、信頼関係を実行すること。信頼関係とは、「私はあなたのことを信頼する」、その代わりに、「私はあなたの信頼に報いることをします」という対等な関係を築くことを意味する。

大江健三郎さんと光さん、大江さんが光ちゃんに教えたかったこととは；“死”を恐れるな。“死”とは、現実の世界(公の世界)である。親はいつか死ぬ。おまえは、自立して生きてゆかねばならぬ。障害を持って生まれた我が子との関係で苦悩する大江さん。その中から生み出される言葉には忍耐強い愛の姿がにじみ出る。人間は子供をもったからといって、自動的に親になる訳ではない。特に父親は。

### <事例 DVD>

正高信男／サルの世界には公の領域は存在しない  
 ／人間はなぜ父親を必要としたのか／人は自動的に親にはなれない  
 美輪明宏／ねんねんころりよ～おころりよ～  
 大江健三郎と光ちゃん／私から公の世界に連れ出す  
 石川清／引きこもりのエキスパート／NHK プロフェッショナル  
 尾崎豊／シェリー、私から公への葛藤  
 歌・ロッド・スチワート & Amy Belle / I don't want to talk about it



大江健三郎さんと光ちゃん